

経済学部の新たな旅立ち〜PEARLの開始に寄せて〜

経済学部 教授 (PEARLアカデミック・ディレクター) 石井 明

2016年9月、経済学部にとっては新しい時代の幕開けとなりました。

経済学部は2016年度の秋学期より、PEARL (Programme in Economics for Alliances, Research and Leadership) を開始しました。このプログラムは、日本語を必要としないカリキュラムで構成されており、卒業に必要となるすべての授業は英語(外国語科目の場合はターゲット言語が使用されることがある)で行われます。一年100人を定員とし、初年度となる2016年度は、入学式の時点で103名の学生がプログラムに登録されました。これに伴い、経済学部的一般入試の募集人数は、2016年度入試より、それ以前と比較して100名少なくなりました。授業言語は英語ですが、カリキュラムは、経済学部が長い時をかけて作り上げてきた伝統的な内容そのものとなっています。

一般的な経済学部の学生と同じことを学ぶPEARL生ですが、彼らには、これまでの経済学部の学生と大きく異なる特徴を見出すことができます。まず、外国籍の学生の割合が高いという点が

挙げられます。2016年度において、外国籍の学生がPEARL内で占める割合は、約30%です。それだけでなく、日本国籍を持つ学生たちも、一般的な学生と比べるとかなり様相が異なります。彼らの中で、国内の一般的な高校を経てPEARLに入学した学生の数は限られています。多くのPEARL生は、まだ短い人生の大半を海外で過ごしてきた、海外経験には乏しいが国内のインターナショナル・スクールで教育を受けてきたというような学生たちです。中には、日本語がスムーズに出てこない日本国籍の学生たちも多く見受けられます。

また、経済学部ではこれまで、全体の中で女子学生が占める割合が少なく、近年は30%台で推移していました。その一方でPEARLでは、女子学生が占める割合が約60%となっています。この観点からも、PEARLがいかに従来の経済学部とは異なっているかを見ることが出来ます。

まだまだ始まったばかりのプログラムですが、PEARL生たちはすでに、自分たちの可能性を見出すために積極的に勉学に励んでいます。